

「笹川杯訪日団 2025」 訪日感想文集



公益財団法人日本科学協会
業務部 国際交流チーム

目 次

★団長・引率者（3名）	・・・ 4
-------------	-------

団長

中国外文局アジア太平洋広報センター	孫 研
-------------------	-----

引率者

浙江大学 歴史学院 教員

申屠苗英

浙江越秀外国语学院 図書館 閲覧推進室 主任

呉鈴林

★「笹川杯全国大学日本知識大会 2024」(17 名)

北京外国語大学 日本語言語文学 修士 2 年

汪禹彤…… 6

北京外国語大学 日本語学部 日本語学部 3 年

胡新悦…… 7

北京外国語大学 日本語学部 日本語学部 2 年

張以恒…… 7

天津外国語大学 日本語学部 4 年

胡嘉琦…… 8

天津外国語大学 日本語学部 2 年

曹仁宇…… 10

華中師範大学 外国語学部 日本語学科 4 年

黄婉青…… 10

華中師範大学 外国語学部 日本語学科 4 年

熊宇航…… 11

華中師範大学 外国語学部 日本語学科 3 年

姚雪洁…… 12

鄭州昇達経貿管理学院 外国語学部 日本語学科 4 年

張雨寒…… 13

浙江大学 日本語科 4 年

許 諾…… 14

浙江大学 日本語科 4 年

鄭軼文…… 15

浙江大学 日本語科 4 年

邓 揚…… 15

南開大学 日本語学科 4 年

賈昕怡…… 16

浙江外国語学院 東方言語文化学部 日本語学科 3 年

楊 浩…… 17

温州大学 日本語科 4 年

朱正杰…… 18

閩南師範大学 日本語学科 4 年

蔡灵婧…… 19

安徽大学 外国語学部 日本語科 3 年

羅馨怡…… 20

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2024」(中国語版)(5 名)

中国人民大学 スペイン語 1 年

李 佳……22

中国人民大学 法学部 3 年

潘笑航……22

南京大学 外国語学部 日本語学科 1 年

祁 妙……24

上海交通大学 法学部 1 年

吳頤澤……25

中国传媒大学 コンピュータ・サイバー空間セキュリティ学部 1 年

楊采

晰……26

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2024」(日本語版)(4 名)

浙江大学 外国語学部 日本語学科 修士 1 年

丁奕臻……28

復旦大学 日本語学部 日本語学科 3 年

張靖苒……28

三江学院 日本語学部 日本語学科 4 年

馮欣雨……29

広州大学 日本語学部 日本語学科 4 年

林家和……30

★「笹川杯日本研究論文コンクール 2024」(3 名)

天津外国語大学 日本語学部 日本語学科 4 年

呉偉泉……32

吉林大学 外国語学部 日本語科 3 年

張祚崢……33

西南民族大学 外国语言文学学院 日本語学部 4 年

頼雨林……33

★「Panda 杯 全日本青年作文コンクール」OG 訪日団同行メンバー(5 名)

台湾大学研究所 国際関係専攻 修士 3 年

南 愛莉……35

アクセンチュア株式会社

花島 寿貴……35

北九州市立大学 外国語学部 中国学科 4 年

森 楽歩……36

千葉大学 医学部 6 年

加藤 佳瑞弘……37

キンドリルジャパン株式会社

服部 大芽……38

★団長・引率者（3名）

笹川杯訪日団を引率しての所感

多元的交流、共に築く未来団長

中国外文局アジア太平洋広報センター 孫 研

(原文中国語)

このたびは光栄にも日本科学協会の誠実な招待を受け、「笹川杯『本で味わう日本』作文コンクール」の引率者そして団長として、この並外れた意味のある8日間の日本を訪問する旅に足を踏み入れました。とりわけ幸運だったのは、浙江大学の申屠苗英先生、浙江越秀外国语学院の呉鈴林先生と協力できたことです。この旅の中では、互いにしっかり協力して、日本科学協会の手配に積極的に合わせ、訪日団を率いる重任を共に担い、全力で今回の日本訪問任務の順調な展開を推進しました。

私たち3人は笹川杯訪日団の引率者兼団長として、この8日の日程の中で、国境を越えた深い交流を共に見届け、収穫が多く、感無量です。

今回の日本訪問イベントでは、体験プロセスで見事な場面が続出しました。洗足学園音楽大学で日本の箏を弾く体験では、学生らは短い時間の中で要領をつかんで、中国の箏との違いを感じ、文化が伝承される中での変遷を実感しました。神田女学園中学校高等学校では、訪日団がチームに分かれてそれぞれテニス、バスケットボール、華道、茶道、合気道といった多くのサークル活動に参加しました。このように身を以て日本の文化に対する型通りの認知を打ち破った団員たちは、伝統楽器からサークル文化まで、全面的に日本の多面的な魅力を見せてくれました。特に沖縄の旅は忘れがたく、団員たちは琉球舞踊、カヌーなどのイベント体験で、無形遺産の文化と自然風景の中、日本の独特な風情を味わいました。

中日未来創発シンポジウムは思想の衝突する舞台でした。両国の青年は中日の文化の違い、未来の発展などの話題をめぐって深く探求し、仕事の方法からサブカルチャーまで、熱く討論しました。相互理解が深まっ

ただけではなく、情報の境界を打ち破って、両国の青年が互いに学び合って、共に向上できるイベントでした。

「Panda 杯」の 6 名の日本の青年が同行し、今度の日本の旅に温もりを添えてくれました。彼らはイベントの各プロセスに積極的に関与しました。服部大芽さんがわざわざ休みを取って参加してくれたこと、また他の「Panda 杯」メンバーが途中で体調を崩しながらも訪日団にサポートを提供しようと努めてくれたことを知り、本当に感動させられました。まさに彼らの親切な協力のもとで、中日の青年の間の友情は迅速に盛り上がり、別れる時は名残惜しさにそっと感激の涙を流す団員もいました。その涙は彼らのこの旅に対する名残惜しさいっぱいを含んで、交流の意味をよりくっきりと示すものでした。

今回の訪日交流は文化の融け合い、心の疎通でした。団員たちは体験の中で両国の知識、文化をより深く理解し、対話の中で未来を展望して、影響し合う中で友情を収穫しました。引率者として、私たちはこのようなイベントが中日の友好な交流を促進する重要性を深く感じます。おかげで両国の青年が固有の認知から歩み出て、開放的な気持ちで受け入れ、交流したのです。今後こうした機会にもっと恵まれ、中日の青年が共に進み、両国の友好関係の発展のためにいつまでも絶えない動力を注ぎ込んで、更に素晴らしい未来のページを共に書けるよう望んでおります。

★「笹川杯全国大学日本知識大会 2024」（17 名）

笹川の縁 一生の情

北京外国語大学

日本語言語文学 修士 2 年

汪禹彤

（原文中国語）

8 日間の訪日旅行が終わり、私も帰国する飛行機に乗り込みました。8 日の旅を思い出すと、感動はとても多く、アルバムをめくると、いっぱいの幸福の追憶があります。

日本の音楽の文化に対する好感から、私は大学から日本語を学んでいます。現在は大学院 2 年生で研究の方向が日本文化なので、日本語を学ぶのはすでに 6 年目です。今回の訪日団の学生の中で学年が一番上でした。

残念なことに、大学の時期には日本の青年と交流する機会がありませんでした。日本語を学んで腕前を発揮する場がなくて悩ましく、学んだことを自ら実践に投入する手立てがなかったのです。

大学院生の段階で、私は多くの中日の交流活動に参加して、日本からの訪中団もたくさん受け入れましたが、みんなの交流は表面で浮かんでおり、得てして深く入り込むことができないと感じていました。

今回の訪日で私たちは Panda 杯の受賞者 6 人の案内により、東京、沖縄、大阪をいっしょに探求しました。日本の高校にお邪魔してお弁当をいっしょに食べ、サークル活動に参加。沖縄では琉球舞踊と一緒に体験し、シーサーを自作して、夕日の下でカヌーを漕ぎました。大阪では同様に中日交流を求める学生と中日のアイデアワークショップを行って、共に中日両国の未来を想像しました。日本の友達と一緒に温泉につかり、同じ屋根の下で泊まることのできる場面なんて、一度も想像したことがありませんでした。

6 人の学生のプランが細かくて仰天しました。すべてのプロセスの時間も場所も細部まで記しており、そして多くの出会う可能性のある問題を考えてあったのです。旅行にはハプニングがつきもので、今回も面倒なことはありましたが、みんなはお互いに恨み言を言わず、積極的に問題を解決して、寛容と信用する力を感じさせるものでした。

日本を旅行して、独りで日本の文化と自然の景観を体験したことはあります。ですが、今度の訪日団は得難い機会で、旅行と全く異なる、人と人の深くとけ合うことのできる世界でした。

今回のイベントの中で、多くの中国と日本の友達ができました。北京か東京でまた会いたいと思います。

帰国した後、自身の日本語の能力を引き続き強化し、今後の中日両国友好事業に従事して貢献したいと
思います。

異文化交流のありがたさ

北京外国語大学

日本語学部 日本語学部 3 年

胡新悦

(原文日本語)

日本語を学び始めてからすでに三年が経ちましたが、実際に日本を訪れるのは初めてのことでした。短い
八日間の旅ではありましたが、この貴重な経験を通じて、日本文化への理解が一層深まり、異文化交流の
重要性を改めて実感しました。

スタッフの皆様には大変お世話になり、心より感謝申し上げます。私たちが楽しめるような活動を考えてく
ださり、細かな配慮をいただきました。そのおかげで、何の心配もなく、リラックスした毎日を過ごすことができま
した。

料理や風景を楽しめただけでなく、勉強になったことも多くあります。神田女学園を見学した際には、日本

の中学生・高校生の学校生活を身をもって体験することができました。その際、ある女の子に窓に貼られた赤い三角形が何の意味か尋ねたところ、「消防用」と答えてくれました。最初は単なる素朴な質問に過ぎなかったのですが、数日後のワークショップで、実はそれがただの簡単な質問ではなかったと気づきました。

ワークショップでは「異国で気になることがあったら、周りの人に聞くか？」というテーマで議論し、アンケートも行いました。その場で聞くより、自分で調べる人が多いらしいです。知らない人ですし、他の国ですし、もちろん不安は抱えているでしょう。しかし、「聞きたければ聞けばいい」という心持ちが、異文化交流を成り立たせるのではないかと感じました。

自国では理解しにくいことが、相手の国では非常に普通であること、そして自分の常識が他国では通用しないことは、異文化交流ではよくあることです。だからこそ、言葉を通じて相手と尋ねたり、話し合ったりすることが大切だと思います。

もちろん、日本では日本語がわからなくてもある程度生活はできますが、日本語を学んでいる人こそ、異文化の人々と心を通わせるための架け橋となることができると実感しました。今回の訪日を通して、日本語を学んできて本当に良かったと深く感じています。

一期一会、山水相逢

(原文中国語)

飛行機の上で、外は夜になった後のぼんやりとした光。

昨晚、温州大学の朱正傑さんが私をちょっとたいて「それじゃ、また会おう」と言いました。私は彼に手を振りつつ、内心では「その『また』って？ また会える幸運なんてあるの？」とこぼしていました。明らかに梅田で遊んで、心の扉を開け放って話し合った友達も、ここでお別れ。二度と顔を合わせる機会さえありません。そこまで考えて、心はあれこれ雑然としました。

沖縄に行ったときの台湾のガイドさんは、私達に別れを告げる時、「一期一会、近くまたお目にかかりましょう」と言いました。一期一会は日本の茶道用語で、人と人のめぐり合いは得がたく貴重、一生でこの一度かもしれないことを指します。そこで思ったのは、一期一会に賛成するなら、再会の時がまたある可能性は何割あるのかしらということです。

でも私はすぐ再会の時がまたあったらどうなるのかなと自問しました。誰もが他人の人生では通りすがりの客であり、すべての命はこの世の通りすがりの客です。いくつかの経験を共にして、共通の思い出を持つこと自体は十分にすばらしいことです。この世の道中、行きながら大切にします。

しかし、大阪の中日青年ワークショップイベントで、北外日本語コーナーで知り合った日本の学友と偶然会いました。彼女はすでに北外の交換留学を終えて、大阪に帰っていました。彼女とまた顔を合わせられるなんて、本当に予想もできませんでした。

そこで張曉風先生の「すべての川、すべての川の水は、最後には海の深い所でめぐり会う」という言葉を思い出しました。再会できるのは私たち個人の肉体ではなく、しかしきっと私達の共通の未来なのです。再会は来年の笹川杯訪日団、Panda 杯訪中団で、幾千幾万の中日の青年がいっしょに立ち、私たちは彼らの間に立つのです。

同様に、中日両国は異なる国でも、河川は結局のところ同じ海に流れ着きます。私たちは一衣帯水の運んで行けない近隣であり、このさよならで一期一会を十分に分かっていますが、再会の時がまたある、山水にめぐり会うことがあると深く信じています。

飛行機は海の上。私は飛行機の中で、この山海を越える「相聞歌」を書きました。

いつも「ありがとう」を

天津外国語大学
日本語学科 4 年
胡嘉琦

(原文中国語)

まず、笹川杯の提供するこの優れた場で、みんなと日本で出会うことができたことにとても感謝しています。私にとって初めての出国、初めての日本で、みんなとの初めての出会いです。ごく短い 8 日の訪日の間、貴重な友情を収穫し、多くの美しい景色が見られて、美味しい食べ物もたくさんでした。

初日に横浜に着いたとき、日本に対する第一印象が「日本の大通りは確かにとてもきれい」だったことをまだ覚えています。商店街、住宅地、オフィスビルは中国と異なる風格で、たとえば商店の看板はいつも立てて並べてあり、設計上にもたいへん生活感があって、庶民の家の美しい娘といった風情です。住宅地は二階建ての戸建てか螺旋階段で上るマンション。オフィスビルはとてもシンプルなビジネスの風情で、配色が紺碧の空と融合していました。「やっぱりこれが日本か」。教科書で習ったこと、外国人の先生や留学生の友達から耳にしていた日本とぴったり合っていました。しかしバスに乗っていて、青い空が次第に真っ赤に染まり、さらにローズピンクににじむのが見えて、日本式建物と電車のうなりの音が加わった時、やはり、このような異国の美しい景色を見ることができてありがとう、という感嘆を禁じ得ませんでした。

飲食の面で、中日の飲食のカルチャーギャップは確かに大きいのですが、ネットで流行っているような「衝撃」はありませんでした。たとえばどこでも氷水を飲むものの、熱いお茶もあり、朝にはあつあつの味噌汁を飲んでカレーライス 1 杯もあれば元気いっぱいです。さらに野菜サラダも手伝って、栄養面では確かに申し分ありません。本土の味つけがやや単一だと言うものの、他の国に異なる選択を提供して、現地の特徴を結び付けて改良できれば、独特の味わいがあります。8 日間の食事はすべて十分でとても楽しく、ねんごろなもてなしをありがとう！

最も印象を深いことと言えば、やはり人との付き合いです。日本へ行っていた間、最も多く聞いた言葉は「ありがとう」だと思います。異なる職業の異なる身分を持つ人が、ほほえみながら、かすかに身をかがめてお礼を言うのは、この日本という国の独特なマナーで、初めて体験しました。このように自分に接する他人を見て、私も敬意と感謝を持ってお辞儀を返さずにはいられません。訪日団の学生、先生たちと一緒に、音楽学院、女子高校に行って文化活動を体験して、沖縄に行って特色ある舞踊を鑑賞して、大阪で各種の名所や

おやつの写真を撮って、カヌーを漕いで、そして日本の学生達と一緒に討論して発表.....に感謝しないと。実は日常生活の中の日本人の大学生は私達とそれほど違いがなく、みんな前向きに生活して向上に努める若者で、胸いっぱいの情熱、善意に満ちた愛すべき人ばかりです。むしろ色眼鏡をかけてずっと偏見を持っているのは、直接接触するには及びません。实际的に交流してみても。

清水寺で遊んだ時に通りがかった寺院のことは永遠に覚えているでしょう。寺院のおじいさんは親切に私達を受け入れ、寺社の関係する知識をたくさん解説してくれました。私はこの方面に対して生はんな知識しかないものの、「私たちの出身国は異なるが、世界のすべての国に感謝とおわびの気持ちを表現する言葉が存在する」という話は心にしみました。

そう、たとえ異なる国の出身で、異なる言語を使っているとしても、内心のすばらしい誠実な感情、人として生きるきめ細かな感動は一致するのです。私たちはずっとつながっている、と分らせてくれた今回の訪日の機会に、ありがとう。

訪日の収穫と感想

天津外国語大学

(原文中国語)

2 月 23 日の最終日の朝、階下で朝ご飯を食べる時、早く上海に戻る学友たちが集合して大型バスに乗るの見かけ、やっとみんなが本当に別れるのだと実感しました。1 日目に羽田空港の数人ずつが集結して 40 人の団体になってから、花島さん、服部さん、森さんと今バスを見送って、羽田空港で顧文君先生と別れ、最後に気づいたのは、北京首都空港で孫研先生、そして最後に残った他の学友と別れたことでした。みんなは少しずつ集まり、ゆっくりと分散しました。

人生の旅ごとに、出会うすべての人とこんにちは、そしてさよならを言うのかもしれない。

これから会うかという、会うかもしれないし、もう会わないかもしれませんが、当時の感覚はずっと心の中に残るでしょう、一期一会です。将来いつかどこかで何かを見聞きすると、いくつかの追憶がまた浮かんでは消え、落ち着いた脳裏できらめいて点滅し、さざ波が広がるかもしれません。

イベントが終わってすぐ、心の中は少しふさぎこんでなごり惜しいばかりで、収穫を語るには、まとめて一気に話しにくいものがあります。しかしこのような多様で、自由で、若い思想が動き回ってぶつかるイベントの中で、一人一人の学友、一人一人の Panda 杯メンバーとの付き合いの中で得た感銘とおぼろげな収穫は、将来あるときにふと現れて、問題を考える方法にこれほど多くの角度があり、正解と間違いの束縛はないことを若い頭に見せてくれるでしょう。生活や仕事に向き合う方法もこれほどたくさんあり、みんながそれぞれに輝いて、それでいて真摯な方法で生きていることも。人生にこれほど多くの思ったことや試みたことの可能性があることも。世界にこれほど多くの見たことのない色彩があることも。続く人生の旅をどう歩くとしても、少なくとも私が

世界を疑う時の解答をくれたのです。

いつも「ありがとう」を

華中師範大学

外国語学部 日本語学科 4 年

黄婉青

(原文中国語)

このたびの日本を訪問する学習の機会を頂けてたいへん感謝しています。先生方、Panda 杯メンバーの周到な計画、訪日団の学友達の親切な助けと付き添いに感謝します。このイベントは本当に有益でした。

携帯電話アルバムを開くと――東京の神田女学園での手作りイベントで、もうちょっとのところで完成できなかった折り鶴が、仲間が何度も根気よく指導してくれてついに翼を展開した様子。海を見たいと言い出した人がいたというだけで、集団で海風しか感じられない真っ暗な宵闇に繰り出し、海辺で明かりを点けて、地図を見ながら「私たちが来たところ」と話している様子。「面白いチームの写真」の裏には、自分は明らかにもう疲れているのに、チームを京都に案内してくれた美しいリーダーの姿がありました。忘れてしまっていたハンカチも取り戻すことができ、旅程に悔いがないのは善意に満ちた人と同行していたからでした。

私たちは異なる国、異なる地区から来て、中国か日本、北京それとも上海、広州、武漢.....私たちはお互いを理解する前にみんな多少の偏見と型通りの印象を持っていたかもしれませんが、本当に言葉と行動で互いに表現や交流を試みてこそ、個人差のほうが集団間の差よりずっと多いことに気づくのかもしれません。沖縄でのシーサーDIY イベントでは、みんなのDIYしたシーサーからどれが中国のものでどれが日本のものかほぼ見分けが付きませんでした。反対に、さまざまな色のシーサーにさまざまな模様がつけられていて、一つ一つが各人の個性を表していました。

善意を収穫し、偏見を打ち破れたことが、私のこの日本の旅で最大の感動です。善意が国境を越え、理解が偏見を取り除きますように。将来、私たちは引き続き心から橋梁を築き、交流をむざむざ止めないと信じています。

文化を越えた交流の旅

華中師範大学

外国語学部 日本語学科 4年

熊宇航

(原文中国語)

今度の訪日団の旅では、ごく短い 1 週間の内で日本の文化と社会を深く突っ込んで体験でき、貴重な友情と悟りも得られました。

東京、大阪、沖縄という三つの地方の交流の中で、日本の地域ごとの文化の魅力を深く感じました。

Panda 杯メンバー 5 人との交流では、中日両国の青年の学習生活を探求して、成長環境は異なっていますが、未来への期待と努力について通じ合っていることに気づきました。日本の高校での交流では、日本の学校生活の厳格さと活力を身を以て感じました。学生たちの礼儀正しさと学習態度は深く印象に残り、彼らが中国の文化に対して興味を持っていたことに喜びと安心を覚えました。

伝統文化の体験はこの旅の一大ハイライトです。高く低く流れる日本の伝統音楽も、リズム感に富む沖縄の舞踊も、日本文化の独特な魅力を味わわせてくれました。伏見稲荷大社の千本鳥居にはさらに震撼しました。その中を散歩すると、歴史の長い流れの中を往来しているかのようで、日本人が信条と伝統をしっかり守っていると感じました。

訪日の旅の最後には、Freebird のメンバーと交流を展開して、互いに文化の体験と学習の収穫を分かち合いました。これにより日本社会に対する理解に深まっただけではなく、文化をまたぐ交流の機会がいっそう大切に思えました。

今回の日本の旅は、本当に文化交流の価値を体得させてくれました。文化の背景の違いは決して理解し合うことを妨げず、かえって双方の相違と共通点をいっそう大切にさせるのです。この旅では視野が広がっただけでなく、中日の友好交流の信念がいっそうかたく信じられるようになりました。

日本の旅－交流の中で新しい自分を発見

華中師範大学

外国語学部 日本語学科 3 年

姚雪洁

(原文中国語)

8 日間の日本訪問イベントは、見事な夢の世界のようで、異国の地の交流の中で、いっぱい温かみと成長を収穫させてくれました。

初めて日本を訪れ、私は自分の口語とヒアリング能力の不足を深く意識しました。でも Panda 杯の学生たちや同行する先生達の情熱と友好が、瞬時に私の緊張と不安を取り除いてくれました。神田女学校で高校生とお弁当を食べ、華道を体験した時、華道の先生の励ましで自信を取り戻すことができました。生け花作品は意に添うものではありませんでしたが、先生が認めてくれたことで、尊重して励ます温かみを感じられました。

大阪で中日交流団体 freebird と一緒に街をぶらつき、伏見稲荷大社をお参りしておみくじを引き、文化をまたぐ交流の楽しみと魅力を感じました。freebird の仲間たちは距離を超えて集い、彼らの情熱と友好は中日交流の深い情誼を感じさせてくれました。

最後の 2 日間のスピーチには更に深く心を打たれました。劉セイラさんが中日の相違に関して共有するのを聞

き、他人の目に映る完璧さを盲目的に追い求める必要はないのだと分かり、熊江琉衣さんのアイデンティティに関する話で、自分だけが自分を定義できるのだと分かりました。

私は日本語が私に新しい自分を発見させたと感じています。私はとても臆病で、大学 1 年の時に演壇に上がるととても緊張して、体は震え、声も震えていましたが、学ぶものが言語であることから演壇に上がる機会が増えて、演壇に上がっても緊張なくなり、震えなくなったことに気づいたのです。また、日本語を学ぶことでほんの少し国際的視野が身につきました。私は日本語を通じて日本人と交流して、自分の世界を出たと言えます。日本語を学んでいることで、日本に来る機会があって、たくさんの人を知って、自分は想像しているほど内気ではなく、本来よどみなく流暢に話せるのだということに気づいたのです。なので、この旅は自分を探る旅でした。

八日間の奇妙な旅

鄭州昇達経貿管理学院

外国語学部 日本語学科 4 年

張雨寒

(原文日本語)

羽田空港を出て、普段見慣れた街とは全く異なる風景を目にしたその瞬間、胸を打たれた。何もかも新鮮で、街全体がピカピカしている。「この異国の地で一体どんな経験が待っているのだろう」という興奮な気持ちは抑えることができなかった。

横浜では、潮風に包まれる赤レンガ倉庫やネオンと赤い提灯が彩る横浜中華街を歩いた。クラシック建築と現代建築が織りなす横浜は海面に映え、幻想的で儚い美しさを放っていた。沖縄では、元気一杯はしゃいでいる修学旅行にきた制服姿の生徒たちとすれ違い、琉球舞踊と三線を堪能した。「常夏の島」と呼ばれる沖縄は、まるでエメラルドのように鮮やかで生命力に満ちていた。京都では、鴨川を渡り、二年坂を登り、石畳の坂道を歩き、古き良き雰囲気味わった。千本鳥居が夕日に照らされ炎のトンネルとなり、稲荷神が凛々しく横に座っている。「鳴くよ鶯 平安京」千年を超える歴史が息づくこの都は、日本独自の魅力と美しさをひしひしと伝わってきた。

この八日間、私たちは琴や茶道、琉球舞踊など、日本の様々な伝統文化に触れ、充実した日々を過ごした。中で一番印象に残っているのは、やはり神田女学園高校での茶道という部活体験だ。以前ネットで茶道の動画を見たことがあるが、実際に現場で体験するのがまた不思議な感じた。部員たちのそのゆっくりとした一挙手一投足は、実に優雅で美しく、まるで茶道の長い歴史を語っているように、私の心を動かしている。出来上がったお茶を両手で軽く持ち上げ、その温もりが掌に染み渡るのを感じた。一口すすり、和菓子の甘味と相まって、抹茶の苦味が徐々に口の中で溶けていった。

旅の最終日のディスカッションでは、この八日間の旅で気づいた中日間の様々な違いについて話し合った。振り返ってみると、飲食の習慣から日頃のマナーまで、多様な相違点があった。しかし、最終的に「それは形の違いにすぎない」という結論に至った。店の看板が如何に派手であるか、街中のゴミ箱の数がどれだけ少な

いのか、それは表のものに過ぎない。お互いの文化を尊重し、お互いの良さを認め合い、「小異を残して大同につく」こそが、文化交流のあるべき姿だと考えている。

訪日の旅があったという間に過ぎ去っていった。北京空港を出た後も、日本の風景がなお私の心を動かしているような気がする。今度は、桜の花びらが風に吹かれゆらゆらと舞い落ちる町中をのんびりと散策し、清水寺に、厳島に、日本ならではの風景をもっと味わいたいと思っている。

覚えていること

浙江大学

日本語科 4 年

許 諾

(原文中国語)

命は経験したことにはなく、覚えていることと、それが記憶に刻まれた経緯のほうにあります。これは大体マルクスの話です。

今あの 8 日の訪問の日程を少し回想すると、脳内に真っ先に浮かぶのは東京の高層ビルなどではなく、大阪の往来が盛んな道路でもなく、車に酔った記憶——揺れ動く車の窓を通して、はるかに、浅い緑色の海水が見えたことです。その常夏の島を見てください！2 月、京都はまだ細雪が舞っていても、沖縄はすでにハイビスカスの花盛りでした。壁いっぱいのベンガルヤハズカズラとブーゲンビリアが、廃墟のような長い建物をよじ登り、レンガの壁全体を覆っていました。高らかに響き渡る海女の歌に従って、3 月の春風が、南国からい湘南へと吹いていくでしょう。

海のことはよく知っています。港はダークブルーで、栈橋の果てには赤い灯台があって、群れをなすウミネコが

小さな白い船のようです。干潮の時は海水が後退して、岩礁の道が現れ、港から向こう岸の港まで歩けるようになります。しかし沖縄の海は違って、あれほど浅く、あれほど落ち着いていて、安定した頻度で行き来して、ある種の新鮮な緑色が見えました。

清水寺から下に歩くと、霊園の中に帝釈天王寺があります。地面を掃いていたおじいさんがとても親切に招き入れ、ここで祭っているのは『男はつらいよ』に出てくる帝釈天だと紹介してくれました。私は主題歌が「帝釈天で産湯を使い……」なのは知っていると言いました。

彼はここで昨日ちょうど集会があったと言いました。集会がない時は、像はカーテンの後ろに安置して、決して出さず、供物台に生花と金蓮を供えているのだそうです。

彼は多くの誠実な話をしてくれました。彼は家に出入りするたび神仏に挨拶するような敬虔な生活をしており、出雲で10年神官を務め、神有月の儀式を執り行っていたそうです。先祖代々の墓がここにあるため、寺院の中で掃除を手伝い、神仏に報いとして捧げているとのこと。義侠小説の中の地面を掃く僧はひけらかすことのない大師で、話に無駄がないようです。

彼いわく「気づくことで築く」。

私は、言語学の面から本当にこの可能性があると思っています。

彼は私にどこの人かと尋ねました。中国だと2度言ってやっと分かってくれました。彼は私が日本人だと思っていたからです。「これはきっと縁結びの神がおわすということ」と彼は言いました。

私が立ち去る時、彼は寺院の中で立って、竹箒を持って、私に手を振りました。その純粋さに言葉が出せず、私も手を振るだけでした——このような敬虔な人に対して「さようなら」は口に出せないし、「また」でもあまりに軽薄です。

日本の内側が見えた

浙江大学

日本語科 4 年

鄭軼文

(原文中国語)

旅は全部で 8 日間。東京、横浜、沖縄、大阪、京都でした。行ったことのある場所にも、足を踏み入れたことのない土地にも行き、記憶の中にあるおなじみの光景や知らない光景を目にして、身の回りの人が絶えず変化して、この旅行の意味を共に書きました。

今回の訪日の旅の中で、日本が友好的な愛すべき隣国であることがよりはっきり見えて、生活の些事の中で日本の友人が見せる本当の気性にも気が付きました。赤がとても目を引く東京タワーに「日本の特徴」である青空が加わると格別の眺めでしたし、沖縄の明け方のそよ風と波浪の中で白く細かい砂に足を踏み入れて、遠くで早起きした漁師が釣を投げるのを見ても、非常に美しいものでした。

一行に対する手配や配慮がこのように周到だったため、私は今回の交流が最もリラックスした、最も暇のない日本の旅だったと称しています。それぞれの日本の友達と心おきなく話すと、日本が別に型通りの印象の中の厳格さと内気さだけではなく、秩序の内側にこのように親切で雰囲気作りのできる人もいることが分かりました。

旅が始まるまえに服部さんととぎれとぎれな連絡があって、彼がすでに仕事を始めた「社会人」で、中国語の学習歴も何年かあると知りました。私がいわゆる同行者は恐らく私たちの日程を少し担当するだけだと思

っていた時、別々の学校や会社から 6 人の若者が全行程を私たちと共にしてくれたことに気づき、本当に感動して止みませんでした。思い出しても、すべての同行者と知り合った友人たちにも感謝を表現したい感情を抑えきれません。森さんは今度の旅行の中で私が最も多く交流した同行者の一人のはずです。彼女は楽観的、明るく朗らかで、付き合いの良さが深く私に影響しました。服部さんはチームリーダーを務め、親切で周到でした。花島さんは私の接触したことがある日本人と全く異なる率直さとユーモアを持っていました。

旅行が終わった後も、彼らと連絡を維持しています。私は情誼がとこしえに存在することを祈りつつ、日本の内側を見せてくれた今回の交流の機会を喜んでいます。

訪日の記

浙江大学 日本語科 4 年

鄧 揚

(原文中国語)

2 月 16 日～23 日、笹川杯大学生日本知識クイズ全国大会の主催チームの一員として、日本科学協会の招待を受け、光栄にも 2025 年笹川杯訪日団に参加しました。今回の訪日の旅は東京、沖縄、大阪などの地を訪問しました。多彩な体験日程、訪日団グループの深い友情、日本の友人の貴重な交流の機

会いずれも忘れがたいものです。

訪日団の活動はシーサーの絵付け、カヌーでの探検など一般的な旅行の体験オプションもあり、また訪問先での昼食からのサークル体験、琉球舞踊などきわめて特徴的な活動もありました。こうした貴重な機会のおかげで自ら今の日本の学生の学園生活を身をもって体験でき、日本の琉球舞踊と中国の深い歴史の源を知ることができました。昔教科書とネットの上で得たインフォメーションコクーン式の認識と比較して、自ら経験するほうが、日本社会と文化に対する理解が進みます。

また、訪日中いっしょに各種イベントを体験するチームのメンバーがいたことにたいへん感謝しています。訪日団の学友はみんな大会の優秀選手で、大多数が日本語専攻の同い年でもあり、集まるとたくさん共通の話題があります。ごく短い 8 日間の中で互に見聞を分かち合って、目新しい体験で認知を広げ、日本語学習の経歴と経験について話したりもしました。今回の訪日旅行は日本の実地調査というだけでなく、私にとっては同じ日本語専攻で同い年の学生の生活を知り、新しい友達ができる千載一遇の機会でした。

最後に、今回のイベントで最も忘れ難いのは Panda 杯のメンバーたちです。彼らは去年に中国を訪問して、またこの時ボランティアとなり、私たちのために心をこめて今回の忘れ難い旅行を企画してくれました。自由行動の時間には花島さん、服部さん、南さんといった Panda 杯のメンバーとの交流を楽しみました。彼らと順調に日本語でおしゃべりして、中日の相違などの面白いことまで話が及ぶと、達成感が自然に湧いてきました。自分が言語を学ぶ価値はこうした場面を実現するためなのだ、と深く感じもしました。日本語ネイティブと少しも支障なく交流することができたのです、たとえ些細な雑談でも。こまごまとした交流の都度、異なる文化環境、異なる社会背景に身を置いているとはいえ、私たちはたくさんの面で依然として通じ合っている、相互理解し、友好的に共存することができるのだと強く感じました。今回の訪日で最大の収穫は、こうした愛す

べき日本の友人と知り合えたことです。

旅行が終わった後、私たちは各自の学業や仕事に復帰して、自分の人生の軌道を継続します。しかし将来いつかまた出会い、貴重な追憶と新しい悟りを持って再びつながって、お互いの生活をやりとりする日が来ると信じています。今回の短い訪日の旅は、一生忘れ難い宝物です。

訪日の感想

南開大学

日本語学科 4 年

賈昕怡

(原文中国語)

飛行機をおりて祖国の土地を踏んでやっと、このすばらしい夢のような旅が終わったと実感しました。8 日前、私は他の笹川杯の優勝者たちと一緒に日本を訪問する旅行を始めました。この 8 日間の旅でどんなにすばらしいことがあり、忘れ難いものになるか、まだ知りませんでした。

8 日間の訪日の旅の中で、私はたくさんの美しい景色を見て、思い出に満ちた写真もたくさん残しました。高層ビル、建物の古跡、青空に青い海、日の入りの黄金色の雲もあります。帰路の高速鉄道でアルバムを

見ると、この8日間の記憶が脳裏に突然どっと入ってきました。東京で、古琴の演奏方法を学んで、一日限定の女子高生になったこと。沖縄で、琉球舞踊を体験して、カヌーに横たわって見た空。京都で、古色ただよ
う建物を観賞し、おいしい抹茶パフェを味わったこと。大阪で、中日未来創発シンポジウムに参加して、両国
の青年と深い交流を展開したこと.....こうした経験はすべて印象深く、収穫もたくさんありました。

最も忘れ難いのは、実はこの道中で得られた情誼です。中国各地からの大学生と知り合い、日本の
様々な青年とも知り合いました。彼らは互いに助け合う訪日団のチームメイトだったり、責任感のある Panda
杯の案内役だったりです。私たちはお互いに双方の言語を話し、両国の文化を共に楽しみ、討論、交流し
て、一つ一つの忘れ難い経験の中で深い友情を結びました。最終日の送別会では、みんながこの8日の幸
せな思い出を分かち合って、一つ一つの感想が共鳴を呼んでいるのが見えました。日本人の案内役と別れる
とき感動の涙を見せる学生も目にしました。

今回の旅行を思い出すたび、日本語を学ぶことを選んだのが本当に幸運すぎると感慨を覚えます。なぜか
というと日本語を学んでこそ日本文化を理解し、笹川杯に参加して、日本の青年と交流できたからです。将
来、自分の力を尽くして中日友好の橋梁になり、両国の友好的な文化交流を永続させられることを望んで
います。

忘れがたい日本の旅

浙江越秀外国語学院

東方言語文化学部日本語学科 3 年

楊 浩

(原文日本語)

知識大会で優勝した時から、ずっと日本への旅を楽しみにしていた。行く前にすでに頭の中で何度も日本での楽しみを想像したが、いざ本番となると、やはりわくわくしてたまらなかった。そして、本番もそんな私を裏切らなかった。正直言って、本当に楽しかった。想像以上に楽しかった。初めの時、もともと同年代の日本人と会うのは初めてだし、それと相まって、横浜でのルームメイトは加藤くん、日本人だから、余計に緊張した。うまくいくのか、どうコミュニケーションをとったらいいのかといろいろ心配したが、そんな心配は要らないほどみんな優しかった。

横浜の夜、加藤くんと二人きりの時、ずっと積極的に話題をふってくれたおかげで、私も日本人との会話にだんだん慣れてきた。更に、二日目の夜に居酒屋に連れてくれて、一緒にもつ鍋を食べたことは嬉しかった。寒い夜のもつ鍋、この上ないぐらい美味しかった。加藤くん、いろいろありがとう。最後会えなくて本当に残念だったが、またいつか会おうね。

次は沖縄、まずは沖縄の舞踊を体験した。本当に想像以上だった。舞踊の先生たちのリズミカルな力強く動くその姿に私は思わず見惚れた。その踊りの中に宿っていた生命力は眩しかった。美しい舞踊を見せてくれて、ありがとうございました。その後、シーサーの色塗りも楽しかった。すでに形となったシーサーに色を塗るだけのことだが、自分のオリジナルなシーサーを作り上げたという感じは意外に良かった。でも、いいことも、そうじゃな

いこともあるものこそ人生だ。そして、当時の私にとってそうじゃないことというのは正にスマホの水没事故だった。

シーサーに色を塗った後、服部くんと一緒にカヤックに乗るとき、服部くんのダイビングに巻き込まれて、スマホが水没して、壊れた。でも、服部くんも不本意で、いっぱい謝ってくれて、ほかのみんなもいっぱい心配してくれて、みんな優しくった。みんなのおかげだからこそ、スマホを失っても最後の大阪を楽しむことができて、せっかくの旅を台無しにしなかった。

失ったものは一つ、得られたものはたくさん。また機会があれば、みんなともう一度旅をしたいな、今度こそ悔いのない旅にするぞ。

最後、ありがとうね、そして、ずっと待っているぞ、みんな。

中国に興味がある人のために

温州大学

日本語科 4 年

朱正杰

(原文日本語)

三カ月ぶりに、「笹川杯全国大学日本知識大会 2024」に入賞した選手たちに会って、浦東空港から日

本に来ました。今回、日本科学協会に招待される日本訪問は、普通の観光だと思ったはずなのに、かわいい人々と出会って、たくさんの友情を手に入れたので、忘れられない思い出になりました。

羽田の入国審査されたばかり、私は最初のルームメイトと出会いました。彼の名前は服部大芽です。パンダ杯に入賞して、五年前に中国の武漢に留学し、現在は社会人二年目です。その時、大芽は「笹川杯訪日団」と書かれた掲示板を挙げて、笑顔であいさつしてくれて、列の前に私を迎えました。今から思えば、あの時一番深い印象が大芽が笑うと八重歯が出る笑顔と爽やかな声です。

だいたい長い間に日本人と日本語で話さないのが、大芽と話すことは意外に日本語会話能力の方法になりました。それで、最初の不慣れなことは自然になりました。その後の一週間、パンダ杯のみなさんとの交流を深めて、私は心より感心しました。

パンダ杯の6人は、知らない私たちに事前に日程を作成して、主催者側に連絡し、一週間朝から晩までいろいろなことを親切にしてくれました。彼たちがするのはただ中国に興味があるためです。

とくに、2月22日に、日中未来創発ワークショップで同じグループの大学生の樋沢さんにびっくりしました。樋沢さんは中国の流行文化に多くの興味を持っていて、中国人の私も知らないインターネットで輝いている有名な中国芸能人をすすめました。樋沢さんは中国語の発音が好きで、京劇の発声方法まで稽古しています。

以前、中国の流行文化の魅力が暗くて弱いというイメージが私の頭に残っていました。それほど人気があることはめずらしくて、初めて聞いたのです。改めて考えてみると、お互いに相手国を好む中日両国の若者は、本来はそれぞれの国の少数派でした。そう考えると、日本の方々との交流をさらに大切にしています。

この一週間出会った人々は、中日友好を深めるために、できるだけ自分の力を尽くしてがんばりました。み

んなの努力のおかげで、笹川杯訪日団の成功を収めました。東京の都会景色、沖縄の真っ青な海、大阪の賑やかな商店街、これからもみんなの笑顔と一緒に、ずっと、しっかりと、目に焼き付いています。

冬の素敵な出会い

閩南師範大学

日本語学科 4 年

蔡灵婧

(原文中国語)

先週、私は笹川杯訪日団に参加して、1 週間の日本文化体験の旅をしてきました。初日、日本に着陸すると、とても親切で客好きな Panda 杯の同行者 6 人に会い、彼らおよび訪日団の他の学友と付き合った初日は歓楽に満ち、夕食の時にも雰囲気は冷めず、みんな食卓で談笑し、おいしい料理がさらによくなりました。

洗足学院音楽大学で日本の箏を体験したことは非常に有意義でした。弦楽器を演奏する私が日本の箏を弾く体験をしたときに気づいたのは、和楽器と西洋楽器の音色がこもこも入り交じったものにも味わいがあることです。神田女学園では生徒たちとお昼を食べ、話し合う中で彼女たちも海外の体験にとってもあこが

れていることが分かり、彼女たちに中国のレストランと鉄道を紹介して、お弁当などの家庭の日常についてやりとりすると、みんなとても喜んでいました。沖縄で体験した琉球舞踊は体を動かしただけでなく、現地の伝統音楽を聞きました。シーサーの絵付けとカヌー漕ぎはとても面白く、水上でみんな思いきり汗をかき、とても楽しんでいました。大阪では、神社の参拝、ランドマークや名所の見学すべて非常に有意義で、日本の伝統の文化を体験できました。シンポジウムでは、みんなで中日の相違を交流して、いっしょに総括、発表して、ゲストの講演を聴いて質疑応答もしました。ゲストの講演から得られたものは多く、はたと納得して、生活の中のカルチャーギャップをどのように処理するかが分かり、こうした収穫を今後の生活に生かしていくつもりです。

今回の訪日でこの冬がひと味違うものになりました。別れを告げる時、みんなは声も立てずに泣いて、名残を惜しみ、経験を心に刻みました。私たちはこの期間の経験を胸に、もっと広い未来へと向かい、今回の訪日を素敵な思い出にします。

繋がりの旅——2025 笹川杯訪日見学の感想文

安徽大学

外国語学部 日本語科 3 年

羅馨怡

(原文日本語)

ご存知の通り、日本と中国の交流は千年以上の歴史を有しています。今回の日本訪問を通し、私はその深い結びつきを自らの体験として実感することができました。

まずは教科書と現実の結びつきについて。私にとって伏見稻荷神社は長年訪れたいと憧れていた場所でした。というのも、教科書に掲載されたその荘厳な鳥居の写真が強く印象に残っていたからです。今回ようやく友人たちと共に参拝を果たした際、目の前に広がる光景が教科書の写真と重なり合った瞬間、「千里の道も一歩から（行万里路読万卷書）」という言葉の真髄を初めて理解できたような気がしました。

次に人と人との繋がりです。昨年3月、日本の学生団体「freebird」が本校を訪問した際、大阪出身の青井さんと知り合い、WeChatを交換しました。今回の大阪訪問では待ちきれずに連絡を取り、1年ぶりの再会を果たしました。心齋橋を散策しながら交わした会話は尽きることなく、国境を越えた友情の温かさを強く感じる機会となりました。

そして文化の相互交流について。特に印象深かったのは日本のカラオケ体験です。中国人の友人たちが米津玄師の『Lemon』や宇多田ヒカルの『First Love』を披露する一方、日本人の服部大芽さんは中国で大人気の「小苹果」を堂々と歌い上げました。互いの国の音楽を通じて、言葉を超えた文化の共鳴を肌で感じる事ができたのです。

歴史を振り返れば、鑑真和上が建立した唐招提寺に象徴されるように、両国は常に文化の架け橋を築いてきました。現代では日本で「麻辣湯」がブームとなるなど、交流の形は時代と共に変化しつつも、その本質は受け継がれています。グローバル化が進む現代において、文化は国境を軽々と超え、新たな形で継承されていくのです。

もちろん課題が全くないわけではありません。しかし私たち若い世代が、歴史を踏まえつつも未来志向で対話を重ね、持続可能な解決策を共に模索していけば、中日両国は共生と調和の新たな関係を築けると確信しています。千年の交流が紡いだ絆を、次の千年へとつなぐ役目が私たちにはあるのです。

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2024（中国語版）（5 名）」

君と同じ舟で渡り、それぞれの岸に達する

中国人民大学

スペイン語 1 年

李 佳

（原文中国語）

日本を訪問する前、私は先入観にとらわれ、今度の日程は団体旅行と何も変わらないかと思っていました。本当に旅程が始まってやっと、訪日団の一員としての体験は、観光客としての体験とはっきり異なることに気づきました。神田女学園への訪問、琉球舞踊の体験、未来創発シンポジウムへの参加、いずれも観光客には体験できないことです。

日本の風景や景色よりも、今度の訪日団がくれた最も貴重な贈り物は日本の青年の友好を感じたこと、中日関係を改善するために努力する多くの団体があることを知ったことだと思います。Panda 杯のメンバー6人と言い freebird のメンバーと言い、ずっと中国からの学生に配慮してくれて、最も印象深いのは、私は日本語ができないので、Panda 杯のメンバーができる限り中国語で交流してくれたことです。流奈さんとルームメイトになったとき彼女がくれた 2 通の中国語の手紙には、いずれも、帰りが遅くなって迷惑がかかることは気にし

ないで、心配しないでといった内容が書かれていました。日本語ができなくて慌てていたのが、こうした善意で簡単に崩れました。他にも取り上げて感謝したいことがあります。進んで私とおしゃべりしてくれた加藤さん、私たちの写真を撮ってくれた服部さん、そして最後の夜を共に過ごした森楽歩さん、皆さんの幸運を祈ります。

日本を訪れた時間は短くても、情は深いのです。最後に、汪国真の話で結びにしたいと思います。「どう感謝しようか、そちらへと歩くとき、一縷の春風が得られたらと思っていたのに、君がくれたのは春の日まるまるだった」。もう「君と同じ舟で渡り、それぞれの岸に達」していますが、「これからは良いニュースがもっとあるはず、川の上の暇人のことを忘れないで」。

言葉の架け橋、心の絆

中国人民大学

法学部 3 年

潘笑航

(原文日本語)

この度、日本科学協会及び笹川平和財団のご招待により、8 日間の訪日プログラムを無事に終えることができた。笹川杯「本を味わい日本を知る」作文コンクールを通じてこのような貴重な機会を頂戴したこと、

大変光栄に存じる。

二度目の日本訪問となるが、前回は6年前、中学校卒業後の家族旅行でのことだった。当時は日本語を全く解さなかった私と比べ、言葉を習得した今、日本で過ごす時間の質が一変したことを実感している。観光客として「案内」される立場から、自ら積極的に「体験」する主体へ——この変化こそが、私の成長を如実に物語っていると感じている。

今回の旅では文字通り"足で日本を測り尽くす"体験を重ねた。東京から沖縄、京都、大阪へと続く道程で、喧騒の繁華街と静謐な海辺、伝統の古都と活気ある商店街を巡り、数え切れぬほどの美しい記憶を刻み込みた。横浜中華街のネオンに彩られた輝き、比叡川でのカヤック漕ぎ、伏見稲荷大社での祈願、道頓堀のグリコ看板前での記念撮影——どれもかけがえのない宝物となった。

しかし何より印象的だったのは、言葉の力を通じて生まれた人間の絆だ。日本科学協会の高橋会長をはじめ、笹川財団の尾形理事長、佐藤常務、洗足学園音楽大学の松尾先生、伝統舞踊を指導くださった高嶺師範など、多くの方々が先輩としても家族のように温かく迎えてくださった。神田女学園の生徒さんたちやパンダ杯・フリーバードの仲間たちとの交流も、国境を超えた友情の輝きを教えてた。

この短い時間の中で、会話を通して、身体を通して、様々な友情の象徴を通して、言葉の力をひしひと感じた。日本語テキストの『中国紀行』で俵万智が列車の中で見た、涙を誘う「言葉の重み」と同じだ。中日一衣帯水の関係の下で、私たちは見知らぬ人から親密な友達に至るまで、まさに対話という言葉の交換を通じて達成されることのように、両国の国民がこのように熱く真剣に交流する機会があれば、両国関係が盛り上がっていく前兆ではないと誰が言えないだろうか。

ところで、私と訪日団の皆さんが日本語を勉強する目的は全く同じではない。法学部の学生なので、以

前の私は、日本語を勉強するのはただ法学の知識を補うためだと考えた。そのため、日本語を便利な道具として使うことに慣れていた。今回の旅行でお会いしたのは、中国に深く関わっている方ばかりだった。中国文化に興味の深い日本人学生や社会人の方、劉先生や熊江先生のように中国出身で日本でのびやかに生活している方、さらにはワークショップで日中ハーフのボランティアの方もいらっしゃった。皆さんとの触れ合いから、言葉は単なるコミュニケーション手段ではなく、ライフスタイルとして特定の文化の中で自然に生まれてくるものであることに気付かされた。現場で本当に他の人の助けを受けて、口をついて「アリガトウ」のあの瞬間を出して、現地で自然と口をついて出た「ありがとう」のひと言が、教科書で学んだ百の例文よりも深い感動を呼び起こす瞬間——まさに俵万智が綴った「言葉の重み」を、身をもって体験したのだ。それが、本人の真情実感を自然に表すことだ。

この旅で得た最大の気付きは、中日交流が「公式の場」だけではなく、市井の人々の心の触れ合いによってこそ真に深まるということである。沖縄の海辺で共に笑い合った瞬間、東京の合気道の稽古室での技練習、大阪の路地裏で分かち合ったケーキの味——こうした日常の積み重ねが、両国の未来を紡ぐ糸となるのだろう。離そうと離せない隣国として、私たち若い世代が言葉の架け橋となり、理解の種を蒔き続ける限り、きっと新しい中日関係の花が咲き誇ると信じている。

北京海淀区の寮でこの記事を書いているとき、再び訪れる日のことを誓った。次はぜひ、私が中国の魅力を日本語で発信する番だ。この「体験」を原動力に、法律の専門知識と語学力を武器に、中日の架け橋となる人材へと成長したい。雲の切れ間から差し込む陽光が、そんな決意を優しく包んでくれるようだ。



(愛莉グループと張さんと呉さん)

8 日間の日本旅行：文字が実際の景色と重なり、交流と通じ合いが現実

南京大学

外国語学部 日本語学科 1 年

祁 妙

(原文中国語)

「笹川杯『本で味わう日本』作文コンクール」一等賞の受賞者として、日本での8日間の修学旅行に参加でき、とても光栄です。飛行機が東京の羽田空港に着陸する時、私は自分が文学の与える多種多様な想像を胸に、本当の日本に向かうのだと意識しました。

8日間は短かったものの、引率の先生とPanda杯の受賞者の仲間が心を尽くして手配して東京、横浜、沖縄、大阪、京都などの地を案内してくれました。この充実したすばらしさに満ちた旅に、思わず紙上の黒い活字との対比を始めてしまうと、それらは生き生きと揺らめき始めて、一瞬で明るい情熱の南の島に変化して、一瞬で雪の舞うような静寂な古寺のようになります。このようなテキストと現実が入り乱れて輝くと、改めて文学のフィルタを通じた真実を考えさせられます。

神田女子学院の茶道部の体験では、抹茶碗を畳の上で指3本分回す優雅な弧から、ふと『枕草子』で描かれた「あてなるもの」が理解でき、日本の伝統の文化のある側面をうかがい知ることができました。中日未来創発シンポジウムでは、数名の優秀なゲストが共有する2重の文化の背景の話に感動しました。文化交流は従来から双方向の川だったのだと分かりました。

帰国するフライトが群雲を通り抜ける時、窓の外の金の輝が浮世絵のだんだんと変化する拓本のようにでした。この8日間の旅で、文学の想像のジグソーパズルにリアルな色のピースをはめることができました。書物の中で読んだ「もののあはれ」や「幽玄」が、ついに茶碗の釉色、街角の静けさ、廟のひさしの角の中で現像され形をなしました。もしかすると、真の文化の理解は、現実とテキストの対話の中で、異質性に対する畏敬を維持した上で、人間性の共鳴の和音を探ることなのかもしれません。今スーツケースいっぱいに詰めてあるのは果物とはがきだけではなく、改めて理解する鏡もあります——これはおおかた異文化交流の最も貴重な贈り物でしょう。

文化を越えた友情
——笹川杯訪日の旅

上海交通大学 法学部 1年

吳頤澤

(原文中国語)

まず始めに、笹川杯の訪日活動に参加できたことを深く光栄に思っています。この経験により日本の文化に対して更に深い認識を持てただけではなく、学友たちと共に学び交流する中で、ごく貴重な友情が得られました。

最も印象深いのは、学友たちと清水寺を見学したときの体験です。清水の舞台に立ち、私たちは京都の

魅惑的な景色を鑑賞する一方で、互いの収穫と所感を分かち合っていました。中日両国からの学生は、背景と文化こそそれぞれ異なっているものの、あのひととき、私たちの心はこのようにぴったり合っていました。清水寺の静かさと深さは、すべての人に自分の人生と未来を改めて考え始めることを促し、同時に私達の双方の文化に対する理解と尊重が更に深まりました。それで気づいたのは、カルチャーギャップが私たち双方の間の交流を妨げることはなく、かえって異なる視角と考えをいっそう重視するよう促せるということです。

清水寺を訪問したほかに、東京のキャンパスの姿、沖縄の自然の美しい景色と大阪都市の風景を共に味わいました。東京の夜の街頭を共に散歩して、独特なにぎやかさと魅力を経験しました。大阪の黒門市場では本場の美味しい軽食を味わって、旅行で面白かった事を分かち合いました。こうした共通の経験により、友情がより深まっただけでなく、互いを理解する中でより強固な信頼と暗黙の了解を築けました。

要するに、この修学旅行は、私にとって、文化と学術の探求だけではなく、友達と共に成長した貴重な時間なのです。これらの経験と友情はきっと、今後の人生で忘れられない大切な思い出になります。

「語り手」になる——笹川杯訪日活動の感想

中国传媒大学

コンピュータ・サイバー空間セキュリティ学部 1年

（原文中国語）

今回の笹川杯の訪日活動に参加したことは、2025 年に入って以来最大の収穫があった出来事です。8 日間の旅は充実しておりしかも首尾良く、参加者全員が一心中日の交流活動に参加しました。旅を共にして、友達になり、いっしょに楽しみや思い出を作ったこの 8 日間は、私にとって一つのすばらしい物語です。「語り手」になって、このすばらしさを他の人と分かち合い、思い出を友人の心に留めたいと思います。

訪日団の大部分の学友と比較すると、私は大学の新入生で日本語の専門の背景がなく、各種のウィンドウを通して日本を知っているだけです。私は本の中から日本を学んで、筆を手執って真剣に中日の共存共栄のビジョンを書き、ついに自分の両目で測る機会が得られたので、物語を話してくれた人にはとても感謝しています。リアルな物語で私という新人の物語も真実に変わりました。

道中で、同じように心からの熱意を持っているみんなと出会いました。多国籍の友人がいて、特に panda 杯の各位と freebird の各位は、たとえ私が日本語のできない状況でも、中国語の手話や友人の力を借りて訳して意思疎通を図り、日本に関する話を分かち合ってくれました。さらに担当の先生方が、私という特別な訪日団員にずっと配慮してくれていました。私を出発する前の言葉の壁に対する焦りから抜け出させ、各種の交流活動の中に溶け込ませてくれたのです。私はこれこそが実現しつつある国際化の物語の一つで、笹川杯の皆さんがそのために努力しているのだと思います。

たとえイベントは終わっても、帰国後も努力して中日の共存共栄と関係がある知識を学び、自分の日本語のレベルも高めて、次回みんなとまた会う時に日本語で交流できるように努力します。世界に自分を知る友がいて、天の果てに居ても隣にいるのと同じ。中日兩岸の同胞が友好から親友になり、共にすばらしい未

来を書き続けます。

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2024」（日本語版）（4 名）

訪日感想

浙江大学

外国語学部 日本語学科 修士 1 年

丁奕臻

（原文中国語）

日本の土地に足を踏み入れたとき、正面に広がったのは、清新な空気と整然として乱れない大通りでした。訪日団の一員としての今回の旅は、異国の文化の魅力を味わうだけでなく、交流の中で成長と感動を得られるものでした。

東京の神田女学園での交流は深く印象に残っています。キャンパスに入ったとき目に入ったのは、生徒たちのきちんとした制服と温かみのある笑顔でした。サークル活動体験では、日本の学生に付き添ってもらって華道を習いました。先生の集中する表情、優雅な举止、いずれも伝統文化に対する尊重と伝承が現れたものでした。その後の関西地区では、京都の古い道を散歩して、歴史の重々しさに包まれました。清水寺のまだらになっている壁は千年の物語を伝え、精緻な庭には職人の知恵が現れていました。当地で、私は日本人の伝統の文化に対する重視を深く感じました。すべての石板、建物が心のこもった保護を受けており、歴史のものの様子を留めたうえで、新しい生命力を輝かせていました。このような文化遺産に対する畏敬の心は、私たち誰もが学ぶに値するものです。

今回の訪日の旅は、日本の文化の美しさを見せてくれただけでなく、そうした美質をどのように自分の生

活の中で実践するか考えさせてくれました。神田女学園では、誠意ある心で交流することを学び、清水寺では、伝統に対する畏敬と伝承が分かりました。これらの悟りは、私が成長するにつれて、未来の道を更にしっかり更に遠くへと歩かせてくれるでしょう。山海を越えて、異なる文化に出会っただけではなく、より良い自分にも出会えたのです。今回の訪日の旅は、私の人生の中で貴重な記憶になり、絶えず学び進歩するよう励ましてくれることでしょう。

忘れ難い文化交流体験

復旦大学

日本語学部 日本語学科 3年

張靖苒

(原文中国語)

今回の訪日の旅を回想すると、銘記に値する瞬間はたくさんありますが、最も難しいのは、やはり神田女学園高校にお邪魔して、日本の高校生と向かい合って交流した貴重な経験です。日本の高校生と向かい合って交流したのが初めてというだけでなく、深く突っ込んで日本の文化と学校生活を理解する貴重な機会でした。

神田女学園のキャンパスに足を踏み入れるとすぐ、身軽で活力あふれる雰囲気に取りつかれました。中国の高校と比較して、ここの学習生活はより自由で多様なようです。神田女学園高校の生徒と昼食を一緒に食べたことが、交流の始まりになりました。気楽な食事の雰囲気の中で、私たちはそれぞれの学習生活を分かち合いました。日本の高校生のカリキュラムは比較的柔軟で、彼らにはサークル活動に参加したり興味を育てたりする時間があるということを知りました。私たちの緊迫した学習リズムとは鮮明な対比を成しており、日本の教育モデルに強く興味が湧きました。

学習生活の交流のほか、私たちはそれぞれの趣味も分かち合いました。好きな音楽、小説、映画などについて話していると、文化背景こそ違っても、私たちはたくさんの共通の興味を持っているということに気づきました。このような文化を越えた共鳴には非常に驚喜を感じ、また違う国に暮らしていても青少年の間には依然としてたくさんの共通の言語があると意識しました。

午後には神田女学園高校のサークル活動を体験しました。私は茶道部を選び、日本の茶道文化に触れました。茶道部の活動では、茶道部の生徒の後について茶道の基本的な儀礼と流れを学びました。茶室の配置からすべての動作の細部まで、茶道はすべて深い文化的内包と哲学的思想を含んでいます。今回の体験を通じて、日本の伝統文化に対してより直観的な認識が持てただけではなく、その独特な魅力に深く引きつけられました。

今回の訪日の旅、特に神田女学園高校で交流した経験は、私にとって並外れた意味のあるものです。新しい友人と知り合えただけでなく、日本の文化や教育に対して新たな認識を得ることができました。この旅で視野が広がり、文化交流をもたらす貴重な機会をいっそう大切にしようと思いました。この経験は私の人生の中での貴重な追憶になり、今後も異なる文化の魅力を引き続き探求するよう私を励まして、世界各地

の友達との交流と理解を増進してくれることでしょう。

訪日の感想

三江学院

日本語学部 日本語学科 4年

馮欣雨

(原文中国語)

今回の日本に行った経験は、恐らく生涯忘れられないものです。今思い出し始めると、更にありありと目の前にあるように感じます。初めの状況は、みんなと一緒に出発する飛行機に間に合わず、退出の太鼓を打たされるものでしたが、幸い先生の助けがあり私は諦めませんでした。初めからみんなと知り合う過程こそ逃しましたが、私も東京地区のにぎやかな街並み、複雑な地下鉄、美味しいうどんの見聞を広めることができました。その後みんなとの合流も自然にでき、いっしょに洗足学園音楽大学で日本の箏を弾く体験をしました。神田女学園中学校高等学校では華道を体験し、また折り紙と中国の伝統の切り紙細工をいっしょに作りました。手伝ってくれた日本の中学生は、最後に折り紙のプレゼントもくれました。こんなに短い時間の中で、最も誠実な感情の成果があって、今思うと本当にすばらしいです。

その後は東京から沖縄に行きました。沖縄の2日間は風邪が最もつらい時でしたが、最も楽しい時間でした。みんながなじみ始め、いっしょに遊んだ「搭子」さんは、かわいらしい少女で、ちょっと内気なところが私とぴったりでした。みんなで琉球舞踊を体験しました。私にとっては、実のところ本当に少し難しい踊りでした。いっしょにカヌーで遊び、夕日の下で、みんなと競走しました。古木に出会って願いをかけたその瞬間、本当にとても良い、すべてがちょうど良いと感じました。

大阪では前に連絡したことがある freebird のメンバーと会い、いっしょに黒門市場や心齋橋をぶらぶらして、みんなはすぐに打ち解けました。あまり遊び歩く暇もなくワークショップに参加しましたが、その後のイベントでみんなの優秀さのほどを知りました。一時間半のブレインストーミングで、各チームが心を合わせて協力し中日の間の相違について構想を練りました。私たち7チームも最初の困惑から最後にはこの課題をまずまずうまく完成できました。彼女たちの案内により、私は徐々にこのイベントの意義を知りました。みんなが言いたいことを思う存分言って、自分の角度から出発して、自分の考えを訴えるのは、私にとっては奇抜なことです。恐らく私は長い間ずっと聞き手の状態で、ゆっくりと発言の欲求を喪失しました。しかしこのイベントを通して、周りの人の活力が感染し、発言もそんなに困難ではないようで、私はいっそう自信を持ちました。私も自分が優秀になれたらと望んでいます。

今回日本を訪問したイベントで私はとても強靱な私自身を改めて認識したようです。私は一人で飛行機に間に合わない事態に向き合い、一人で日本に来ることができ、大胆な友達との交際もできました。もちろん、これらの優秀な学友と一緒に交流したのは当たりでした。自分も優秀になりたい、追いつかなければと思い始めました。

訪日の1週間、私の収穫

広州大学
日本語学部 日本語学科 4年
林家和

(原文中国語)

1週間の訪日イベントを通じて、多くのことが得られました。その中で最も重要なのは、友達だと思っています。

今回の訪日の前は自分に集中する性格で、自分のことや考え方に集中して、他の人と疎通することは少ない方でした。なので、私は時に自分を鑑定しては時に自分を疑ってばかりいました。私のように心理の困難に対抗しながら、向上し続ける人は本当に存在するのか、自分の踏ん張りに意味はあるのか、と考えたりもします。なので出発する前に、今度のイベントの中で、多く他人に関心を持ち、他人が何を思っているのかを知ろうと決めました。

驚いたのは、友達になる中で、自分の踏ん張りが検証され認められるのを実感できたことです。今回のイベントの中で1人、腹の底を打ち明けやすい友達ことができました。最初のルームメイトです。二人とも質の良い友情を持ちたいと望んでおり、日常生活にとどまらず、生命、人類、本質性の問題に対していっしょにもっと探究できる友情です。生活に対する考え、未来に対する積極性のいずれも共有しており、支持されていると感じました。

また、他人に関心を持つことを通じて、他人を鏡に、交流関係の中で、どのような行為が適当、妥当で、どのようなことが常軌を逸したこと、よくないことなのか、ゆっくりと学ぶこともできました。私は他人の観察を通じて、他人の社交技巧、立ち居振舞いなどを学ぶと同時に、他人が不合理な行為をした時、将来の自分が同じ失敗を繰り返さないよう自分に警告しました。私は今回の訪日で、友達が私の最も貴重な財産で、自分を改善させてくれると感じています。

★「笹川杯日本研究論文コンクール 2024」（3 名）

人生は体験だ—文化をまたぐ心の旅

天津外国語大学

日本語学部 日本語学科 4 年

呉偉泉

（原文中国語）

ごく短い 8 日間の訪日研修は、文化をまたぐ心の旅も同然でした。横浜、東京、沖縄、大阪、京都、すべてでかけがえのない追憶は残りましたが、最も大事なものは、道中の景色と経験だけではなく、一群の優秀

であたたかい同行した仲間や日本の友人達との交流と衝突です。この旅で日本の文化をより立体的に感知でき、また深く文化交流の意味を体得できました。

初日の横浜の夜、準備不足のため、私と同行した仲間は、まる 7 キロメートル歩いてやっとホテルに戻りました。ひどく疲れましたが、おかげで日本の街頭の夜の景色の中に浸って、この都市の静謐さと秩序を経験することができました。東京では銀座と東京タワーの間を駆け回って、高いビルが林立して灯りがきらめく都市の姿を感じ、日本の都市のにぎやかさと効率のよさに驚嘆しました。しかしもっと印象深いのは、当地の文化の包容性です。現代と伝統がこの都市の中でとけ合って、古い神社であろうと、最新流行の商店街であろうと、ある種の独特な調和の美しさを見せていました。

沖縄の琉球文化は、日本の多元性に対する認識を深めてくれました。伝統舞踊はつまらないかと思っていましたが、その中に浸ってみると、踊りの中に含まれた琉球の人々の歴史と精神によりよく気づきました。日本の文化は決して単一ではなく、各地で独自の特色を持つ地域文化が形成されています。カヌー大会での喜びで、人と人の間で国境のない感情が共鳴するのがいっそう感じられました。文化背景がいかに違おうとも、楽しみと協力の言葉はすべて通じ合っているのです。

この旅で深く理解できたことは、文化の魅力はその外在する形だけでなく、その文化を形作った人々の考え、習慣、価値観のほうにあるということです。そして本当の文化交流は、簡単に相手の習わしを調べることではなく、自らの体験を通じて、このような文化の背後にある論理と感情を理解しようということです。日本社会の秩序感、職業精神、および細部の極致に対する追求を深く感じると同時に、中日両国には多くの面で相違があるものの、感情の交流と良い生活の追求の上では驚異的な似たところを持っているのだと実感しました。

「人生は体験だ」。今回の訪日で、本当の成長は絶え間ない体験と交流に生まれるものだという確信が強まりました。道を同じくする仲間たちと文化の境目を越えて、お互いの違いと共鳴を感じようとするこうした機会は、今後そうそうないかもしれません。しかしだからこそ、今回の旅がとりわけ貴重なものに映るのです。この8日間のあれこれを心に刻み、今後も引き続きオープンな気持ちで世界と向き合い、実際の体験で理解を深め、文化交流を表面的なものでおわらせず、お互いをつなぐ橋にしたいと思います。

山海を越えた日本の旅：文化の旅と友情の花

吉林大学

外国語学部 日本語科 3年

張祚崢

(原文中国語)

8日間の日本の旅は、すばらしくて並み外れた文化の旅のようで、たくさんの収穫がありました。この短い旅の中で、たくさんの志を同じくする友達と知り合えただけでなく、日本の文化の独特な魅力を味わうことができました。特に琉球舞踊の体験では、伝統文化に対して全く新しい認識を持つことができました。

東京のにぎやかで近代的な感じには揺り動かされました。高層ビルが伝統建築と入り乱れて輝き、日本の多元性と包容性が見られました。大阪の美食とにぎやかな街は日本の暮らしの気配を感じさせて、友達とたこ焼きを味わい、心齋橋をぶらついて、談笑の中で友情を深めました。沖縄の静かで独特な文化には夢中になり、去るに忍びないと感じました。琉球舞踊の体験では、その優美な舞い姿、高く低く流れる音楽に深く

引きつけられました。踊り手たちは伝統衣装を身につけ、リズムに従って軽やかに舞い、すべての動作が深い文化の内情を含んでいました。時空を越えて沖縄の伝統文化の質朴さと魅力を感じた気がして、また文化の力は伝承と刷新の中にあるのだと分かりました。

訪日感想

西南民族大学

外国語文学学院 日本語学部 4 年

頼雨林

(原文中国語)

今回の 1 週間の訪日イベントは収穫が多く、日本の文化と社会を深く知ることができただけではなく、たくさんの志を同じくする友達と知り合えて、中日友好交流の重要性をより深く体得できました。

初めて日本国土に足を踏み入れた訪問者の私には、日本のきちんとしていて秩序ある様子が印象深いものでした。空港から都市の大通り、さらに田舎の路地まで、きれいできちんとした環境がどこにも見られました。厳格なごみの分別の制度、公共の場所の整然とした様子、そして市民の自覚的に環境を守る習慣、す

べてに驚きを感じ敬服します。街頭を歩いていてポイ捨てされたごみはほとんど見られず、にぎやかな商業区であっても、耳障りな騒がしい音がなくて、整然として調和がとれている雰囲気でした。

今度の訪問過程では、志を同じくするたくさんの友達と知り合いました。中国からの同行者だけでなく、親切で友好的な日本の友達も多くいます。共通の興味や趣味、似ている文化の背景と双方の国に対する好奇心でまとまり、お互いの見解を分かち合っ、異文化交流をしました。出身国こそ違っても、多くの面で私たちは似ており、いずれも世界を知り、視野を広げ、友達づきあいをすることを渴望しています。このような国境を越えた友情は中日の民間の交流の意味を感じさせ、またこうした交流活動を通じて両国の若い世代の間の理解と友情がきつとより深まるのだと信じさせてくれます。

笹川杯論文大会のくれた機会に心から感謝します。日本の風土と人情を自ら体験する機会になっただけでなく、実際的な環境の中で自分の日本語を運用することもできました。日本のレストラン、店舗、駅などの場面では日本語で注文し、道を尋ね、日本人と交流しました。流暢に表現できず緊張するときもありましたが、相手が辛抱強く耳を傾けて応答してくれるたび、この上ない喜びを感じました。この経験でより自信が付き、また言語は意思疎通のツールだけではなく、文化理解の橋梁でもあるのだと実感しました。本場の日本の美食を味わうこともできました。お寿司、ラーメン、天ぷらいずれにも、日本料理の食材に対するこだわりや細部に対する追求の極致が現れていました。これらの美食は味覚を満足させただけでなく、日本文化の独特な魅力を感じさせてくれました。

今度のイベントでは貴重な思い出ができ、将来の中日交流により期待が持てるようになりました。今後も類似のイベントで、両国の若い人が相互に理解し合っ、友情を増進する機会がもっと多くあることを望みます。絶えずコミュニケーションをとり交流してこそ、誤解を解き、よりしっかりした友情を築くことができるのです。ま

た、中日両国の友好交流活動がますます発展し、両国民により多くの理解と信頼をもたらして、未来の協力にもっと頑丈な基礎を打ち立てることを心から望んでいます。

★「Panda 杯 全日本青年作文コンクール」OG 訪日団同行メンバー(5 名)

型通りの印象を越える：リアルな交流で築く中日友好

台湾大学研究所

国際関係専攻 修士 3 年

南 愛莉

(原文中国語)

大学の頃から日本の内閣府と中国政府の青年交流プロジェクト、中日学生会議など多数の中日交流活動に積極的に参加してきました。今回は笹川杯訪日団の随行通訳を担当し、これまでに参加してきた中日交流事業の中で最も交流の密接なものだと深く感じました。

以前のイベントはコロナ禍の影響でオンライン交流が主体となり、討論を通じた相互理解の促進が主なものでした。今回は対面しての交流で、中国の学生たちと一緒に遊覧、体験して、経験を共にする中でしっかりとした関係を築きました。

このイベントでは、「日本人」「中国人」といった広範な概念で双方の相違を理解しようと試み、中日の友好を促進する方法とするのは、恐らく正しくないのだと実感しました。

多くの中日友好促進プロジェクトでは広い範囲で分類する方法をとりがちです。例えば「中国人は日本人より主張性があり、日本人は相対的に内向きだ」といったように。しかし、私はずっとこのような大雑把な定義に対する判断を保留しています。この 8 日間の交流で、各人の個性と表現方式はすべて独特だという確信が深まりました。

今回の訪日団の学生の中には、表現に優れる人も、相対的に内向きな人もいました。これは決して優劣ではなく、単純に善し悪しで評価することもできないものです。中国の人々の中にも同様に多様性があり、各人の性格と価値観は異なるのだと深く身にしみました。

「日本人」「中国人」という枠組みだけでお互いを理解しようとする、型通りの印象に合わない友達と知り合う術がなくなるでしょう。中日友好の探求はもちろん重要ですが、このイベントを通じて実感したのは、重要なことは一人一人が自然で肩の力を抜いた形で真の友情を築いてこそ、中日友好の本当の意味があるのではということです。

再認識した自国の魅力

アクセンチュア株式会社

花島 寿貴

1 週間の訪日研修への同行を通して、様々な中国人学生との交流を経験した。初めて来日する機会を得た学生、すでに日本での留学経験をもつ学生など様々な経歴をもつ中国人学生と交流することができた。訪日研修全体を通して私が注目していた点は「中国人学生からはどのような視点でこの国が見えているか」だった。日本を見つめる視点についてそれぞれの学生で差異はあったが、どの学生からも日本のもつ魅力について日本人の私が再認識させられた点は共通していた。特に印象的だった 2 人の学生の例を挙げ、私が再認識した日本の魅力について触れたい。

まずは日本語学科 3 年生の学生の例を挙げたい。彼は研修旅行全体を通じて丁寧な口調で周囲に接し、物腰も非常に柔らかかった。そこまで積極的に周囲と接する性格ではなかったため、彼自身の趣味、趣向について具体的に理解する機会は少なかった。しかし、研修旅行最終日に彼がもつお土産を見て彼が日本に興味をもったきっかけを知ることができた。彼がお土産に選んでいたのは日本の歴史に関する書物だった。十冊はゆうに超える書物を持ち、ホテルを出発するバスに乗り込む彼の表情は非常に穏やかだった。日本という国が醸成してきた歴史をきっかけに彼はこの国に興味をもってくれていたのだった。過去にこの国で生み出されたストーリーが中国人の方を惹きつけていると強く感じるとともに、私自身の自国の歴史に対する知識不足を少し恥じた瞬間だった。

次に挙げられるのが、日本語学科 4 年生の学生だ。彼女は日本のドラマ、映画を通じて日本に興味をもち大学進学時には日本語を専攻に選んだ。日本のドラマ、映画に関して彼女がもつ知識の幅や深さは今回同行した日本人の誰にも勝っていた。研修旅行を通じて様々な場面で景観、食事などを過去に視聴した映画やドラマの中の場面に例えていたのが印象的だった。中国人である彼女にとっては、中国の映画、ドラマを視聴するほうが日本の映画、ドラマを視聴するより圧倒的に容易なはずだ。しかし、言語の障壁を乗り越えて

でも視聴したくなる映像コンテンツを日本から発信できている、と感じられたことは日本人として強く誇りに感じた。

これまで大学や会社など、様々な場面で日本に興味をもつ外国人の方と接する機会があった。この国に興味をもつきっかけとなったものとして、多くの方がアニメを挙げていた印象だ。しかし、今回の研修旅行でアニメに限らず様々な視点からこの国の入口が海外へ開いていることを強く感じることができ、自国への知識不足も痛感させられた。まずは中国人学生の皆が推薦してくれた書物、ドラマ、映画を通して自国への理解を深めるところから始めたいと思う。

良縁

北九州市立大学

外国語学部 中国学科 4 年

森 楽歩

「日本語を学んでよかったと思った。」

最終日前夜の歓送会で、一番仲良くなった学生が言った。その言葉を聞いて、数日の思い出がはっきりと脳裏に再生された。初日の夜に、ホテルの部屋に集まって一緒にカードゲームをした。カードに書かれているモ

ンスターに名前を付けるゲームで、中国語と日本語を織り交ぜ、お互いに言葉を学びながら遊んだ。一気に仲が縮まったのを感じた。沖縄では一緒に温泉に入った。中国の温泉は、水着を着て入るのが一般的だと教えてくれた。タオルは湯船につけない、先に体を洗ってから浸かるなど、日本の温泉のルールを伝えたり、サウナで我慢対決をして汗を流したり、楽しい時間を過ごした。朝は早起きをして、歩いて近くビーチまで朝日を見に行った。

この1週間、日本で中国留学をしているような、中国語に囲まれた環境だった。多くの新しい語句や表現を知り、リスニング力もスピーキング力も上がったと実感している。訪日団の日本語力と日本メンバーの中国語力に刺激され、私もさらに中国語を流暢に話せるようになりたいとモチベーションが高まった。

「私も中国語を学んでよかった。」彼女たちが日本語を勉強し、私が中国語を勉強していたからこそ実現した交流であり、巡り合えた縁だ。多くの中国の学生とこれほど短期間で濃密な時間を過ごし、文化交流をする経験は忘れられない素敵な思い出になった。

最後に、このような貴重な日中交流の機会をいただき、本当に感謝している。準備段階から関わり、訪日団が楽しめるように運営をサポートする中で、様々なハプニングが起きたが、そのおかげで臨機応変な対応力が身についた。これからも今回出会った縁を大切に、交流を続けていく。そして、積極的に日中交流事業に参加し、両国の友好に貢献できるよう努めたい。

感想文

『邦人』／『異邦人』

千葉大学

医学部 6 年

加藤 佳瑞弘

考えれば考えるほど、その境界は曖昧になる。日本人とは何か、という問題だ。日本語を話し、和食を食べ、街中に溶け込む見た目であれば日本人だろうか。もちろんパスポートを見れば国籍は区別できる。しかしひとたび、日本人よりも日本語を深く理解する中国人、日本の古典文学を愛する中国人、日本神話を流暢に説明する中国人に会ってしまうと、そんな区別は無意味に思える。一方でこんな問題もある。日本は地域によって言葉が異なり、食べ物が異なり、見た目も違うのである。日本人の定義は意外にも困難を孕んでいる。

私はボランティアで笹川杯訪日団 2025 に同行した日本人である。この旅行の中で、日本に関心を持つ中国人学生 30 名弱と関わる機会を持つことができた。彼らとの触れ合いの中で感じたことをここで振り返りたいと思う。

旅程の前半は東京・横浜であった。相部屋の学生は非常に面白い人だった。日本への造詣が深く、日本に関することで知らないことはない、と思えた。VPN を駆使した Vtuber オタクでもあり、あらゆる日本語のスラングにも通じていた。

女子高では面白い女子高生に出会った。相手から話しかけてきてくれたのだが、彼女は中国人の両親を

持つ、「日本で生まれ育った中国人」だった。彼女は国籍上中国人だから、日本の大学だけでなく中国の大学への進学も視野にあった。彼女ならやっていけるだろう。通訳になりたいという彼女の夢の前では、国境は障害どころか、チャンスそのものである。

旅程の後半は沖縄と大阪であった。沖縄で伝統舞踊を学び、シーサーの絵付け体験中に感じたことがある。琉球王国は中国の香り漂う場所だった。そもそも伝統舞踊は琉球王国が中国からの使者をもてなす舞にルーツがあるのだという。本当に沖縄は日本だと言い切れるだろうか？ 私には初歩の沖縄方言すら聞き取れる自信がない。そしてそれは大阪も同じだ。関西と関東は今でこそメディアと交通網を通じて繋がっているが、明治以前は別の藩や国だったのである。

訪日団の同行で気づかされたことは、外国人だから日本を知らないなどと侮ることの愚かしさ、同じ日本人だから分かり合えるだろうと思ひ込むことの危うさである。最も大事なことは、誰であれ相手への敬意と関心を常に持ち続けることだ。

訪日団感想文

「まんぱん」

キンドリルジャパン株式会社

訪日団の最終日、スタッフの方からインタビューを受けた。「あなたはなんでこの訪日団に参加しようと思ったのですか?」。私の答えとしては、「訪中団でとても大切な思い出をもらったので、今度は恩返しとして、思い出を作る側に回りたいと思ったからです。」。これは前から思っていたことなのですからと出たのだが、この答えを言ったときにふと頭に浮かんだことがある。思い出をもらったのは私の方なのでは?

楽しむ気持ち一つで参加した訪中団とは違い、事前準備から始まった訪日団。パンダ杯メンバーは顔なじみのメンバーだったが、企画をする側となると、皆頼りがいがあった。私は大阪チームだったため、日程的には最後の日程。どうすれば訪日団の皆に喜んでもらえるだろうか、そう考えた先に浮かんだのは最後の歓送会だった。内容はスライドショーや写真コンテスト、訪日団の一人一言。することは決まったもの、まだ中身は空だ。どんな写真やどんな感想が出るかは分からない、ドキドキしながら初日を迎えた。

初日の空港、訪日団の皆を無事に迎え入れた。皆と仲良くなれるか不安だったが、その心配は不要だった。訪日団の皆は話しかけるとたくさん返してくれ、すぐに仲良くなれた。日本の好きなものを話してくれたり、中国のお土産をくれたり、気になったことをたくさん質問してくれた。さらには 1 週間あることで、東京、沖縄、大阪と様々なイベントを経てたくさんの人と交流していくことが出来た。

その後日程は進んでいき、大阪での最後の歓送会。スライドショーに映された写真には、皆との思い出が詰まっていた。その中には、楽しくて笑いあった姿もあれば、別れが寂しくて流した涙もあった。企画段階では

思い出が0のスライドショーも、気づいたらたくさんの思い出にあふれていた。私はとても嬉しかった。そしてそのどれもが大切な思い出、訪日団の皆、本当にありがとう。皆も同じように思っていてくれたら嬉しいな。